

## 日本的職業観とロータリーの職業奉仕

日本的職業観、別言すれば「日本の商道德」を語る上で欠かせない人は、江戸時代中期の思想家、石田梅岩（ばいがん 1685-1740）です。梅岩の有名な言葉に「先も立ち 我も立つ」というものがあります。「先（相手方）の利益をまず考えてみるのが自分の利益につながる」という意味であり、まさに、「超我の奉仕」、「最もよく奉仕する者 最も多く報われる」というロータリーの標語そのものです。「商いは卑しいもの」とされていた時代に、商売に向き合うにあたっての勤勉さ、儉約、誠実さを求めることによって、その商売は社会からの信頼を得て持続的に発展するという、「商行為の社会的意義」を説いた点で画期的だと言われています。

梅岩の教えは、江戸時代から明治時代にかけて活躍した近江商人（滋賀県発祥の行商人）の「三方よし」、つまり、「売り手よし 買い手よし 世間よし」の三つがそろって初めて真の商いであるという思想、倫理原則に通じています。

このような日本的職業観は、職業は、単に生きるのに必要な利益を得るためだけではなく、職業を通じて社会の調和と発展に貢献するとともに、職業を通じて人間性を高めるといふ、より深い働き方、生き方を探求するためにあるということを示しています。

梅岩の教えや近江商人の「三方よし」の思想は、明治以降の経営者に強い影響を与えています。

「道徳経済合一説」（公益と利益の一致）を説く渋沢栄一（1840-1931 日本資本主義の父）、「水道哲学」（社会全体を豊かにすることが企業の使命）を説く松下幸之助（1894-1989 経営の神様）、さらには、「利他の心」（利他の心をもって経営せよ それが、経営と人生の原理である）を説く稲森和夫（1932-2022）などなど。

しかし、梅岩の教えをさらにさかのぼると、2500年前の仏教の教え「自利利他」に行き着きます。「他人に施しをすれば、その徳がめぐりめぐって自分に返ってくる」といふ教えです。

どうです、ロータリーの「職業奉仕」の理念には、このような深い背景があるんです。じゃあ、梅岩の教えや「三方よし」を始めとする日本的職業観、仏教の「自利利他」の教えなどがあれば、ロータリーの「職業奉仕」はすべてカバーされて、議論の余地はないのでしょうか。

いや、違います。ロータリーの職業奉仕は、これらのことを前提として含みながらも、その他にも、「顧客満足を最重視する最善の経営方法」とか、「職業を活かした社会貢献」とかもその内容として取り込んでいます。さらに、前提となる職業観に関してみると、「職業倫理」にしても、「事業に奉仕の理念を適用すること 職業は社会への奉仕であること」にしても、「天職論」にしても、その中味をなるべく分かりやすいように整理分類しようとしているのです。いわゆる「職業奉仕の森」ですね。

「職業奉仕の森」の中で迷わないためには、このような背景事情も知っておく方がいいと思ひまして、この作文を書いてみました。